屋敷雛形の書誌的考察

A BIBLIOGRAPHICAL STUDY OF JAPANESE MANSION DESIGN SOURCEBOOKS "YASHIKI-HINAGATA"

山崎 純*, 岡本 真理子**, 河田 克博***, 富 謙 和善***
仙田 滿***, 内藤 昌***

Jun YAMAZAKI, Mariko OKAMOTO, Katsuhiro KAWATA, Kazuyoshi FUMOTO, Mitsuhiro SENDA and Akira NAITO

For the purpose of systematical studying of Japanese traditional theory of architectural design, especially about its historical and cultural meaning, we study the architectural characteristics of the orthodoxy of the architectural books on Japanese traditional houses "Yashiki-Hinagata" by treating of them from bibliographical, substantial, and theoretical aspects. In this paper, we organized 7 types from 62 materials of "Yashiki-Hinagata", and analyzed them bibliographically. As a result, in the end of 15C, principle books were formed with the concept of "Oku", and they became membrandums with the concept of the practical design of "Buke-Yashiki". In the 17c, learned books were made for the organization of systematical theory of housing design, after that they spread as miscellaneous records.

Keywords: "Yashiki-Hinagata", "Oku", bibliographical study

屋敷雛形, 屋, 書誌的考察

序

日本建築が彩るす空間が、世界に誇る『古典』として美的体系の極致を顕現している事は、今日あらためて評価されている。そして、建築というものが常に時代の文明・文化を結集して生まれてきている以上、環境の変形という設計行為には、精神文化を基盤とする哲學・美学をふまえた（日本古典建築）としての設計理論が存在する。古来日本では、それは名匠・棟梁の伝統（技芸）として研鑽されてきた。さらに近世末期の建築家に至って、彼らの高邁な職業は建築学教書としての系統的記述をえた建築書へと顕現させるのであった。こうした（日本古典建築書）は、現在では総数600余本を確認できる。人類の文化とその社会的変容をめぐる文化的状況がなれば、建築に鑑みて非戦西宋における構築方法の歴史的検証を今日の課題とする我々が、歴史的背景を基盤とした日本建築の将来像を確実に展望するためには、日本古典における「建築学としての設計理論」、すなわち設計「学理」に注目して、その本質的な具体像を明らかにする必要があると考える。

そこで本研究は、日本が近代高等建築教育で軽視した日本建築様式における設計学理を、日本古典建築書の分析から探究する事を目的として、ここでは特に、住宅に関する建築書を「屋敷雛形」と総称して集積し、直接の研究対象とする。そして本稿にはじまる「屋敷雛形の研究」では、住宅建築様式に伴う理論の再検証について、設計理論の展開過程とその文化的意義を体系的に論じ、最終的には、中・近世建築界に果たした（日本古典建築学）体系を歴史的評価する。まず本稿では、応崇寛より明らかとなる62本に及ぶ『屋敷雛形』の実物を、系列ごとの成立年代順に書誌的考察を行う。そして個々の内容的には学的な考察は別冊に譲り、とりあえず書誌の上から屋敷雛形の変遷を通覧して、その特徴を論じる事を課題としたい。

1. 屋敷雛形の系列

日本古典建築書には、中世・近世までに活躍した大工家に秘伝としんで伝わる筆写本と、公刊された本版本とがある。秘伝本については、各々の筆者や伝来経緯による流派（四天王寺流・建仁寺流）や組織（上方、作事方・小首方等）の別により、技術的な内容面において異様にいえるがここでは、そこで本研究では、（1）「上方覚書系本」（14点）、（2）「四天王寺流系本」（6点）、（3）「武家雛形系本」（20点）、（4）「加賀建仁寺流系本」（8点）、（5）「江戸建仁寺流系本」（7点）、（6）「小首方系本」（2点）、（7）「雛流系本」（5点）の各系列ごとに、その書誌を述べていきたい。

---

* 東京工芸大学大学院理工学研究科建築学専攻
** 東海大学大学院文学研究科 哲学科 教授・工博
*** 名古屋工業大学工学部社会開発学科 助教授・工博
** 東京工業大学大学院工学研究科 教授・工博
** 愛知産業大学造形学部建築学科 教授・工博

Graduate Student, Graduate School of Science and Eng., Dept. of Architecture and Building Eng., Tokyo Institute of Technology, M. Eng.
Prof., Dept. of Aesthetics and Art-History, Faculty of Literature, Tokai Women's College, Dr. Eng.
Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Urban & Civil Eng., Faculty of Eng., Nagoya Institute of Technology, Dr. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.
Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Formative Arts, Aichi Sangyo University, Dr. Eng.

NII-Electronic Library Service
2. 上方覚書系

建築先進地域における建築技術の特徴、伝統ある上方覚書体系は、室町時代に西山建築様式に移り、安土桃山時代に形成される。立て篭も、やや古風な部分もあるが、全般に観ると、上方建築様式を示すと考えられる。

2-1. 『三代目』（西山正助』八句蔵）

『日本建築家名鑑』と称する室山建築家、一部に日本を含む（木割）に関する内容をもつ。ここにおいても他の方の様に新しい構造が形成されて、あると伝統的な建築様式を形成されている。

2-2. 『（後藤家）新制定寺教通書』（袋書）1冊、小坂本（28.2cm x 20.0cm）。

2-3. 『（林宗）木花』（東京大学中央図書館木花本家文庫）

袋製1冊（全2冊）。

室町時代から、内裏造営にあたる大工物候の地位にある木花家、木花氏の業績によって集積されるもので、『林宗（木花）木花図鑑』との関係ある2冊である。

2-4. 『（今宿屋）兵衛伝来目録』（第1冊）、安田家文庫

無題紙、袋製1冊（全2冊）。

安田家は中京家支脈の安田家で、本書はその設計技術書である。

2-6. 『（西山光祐覚書三十一色）』（奈良市立郷土資料館）

白表紙、袋製1冊、半紙本（22.5cm x 16.0cm）。

奥書は『西山若講師』（1615年）十日に日光堂所（現在の東京）所製作、後に上の三十一色に記されたとする。

2-7. 『（松尾覚書）』（名古屋工業大学）

茶表紙、大袋製1冊、半紙本（22.3cm x 15.8cm）。

奥書に『慶長拾拾年（1856年）五月吉日』の記載があると、上記の様に伝えることになるが、内容としてはこれよりは、項目や順序を大切にして関連の存在が推定できる。本名は表記されていないが、他の文献に於ては問題点を有するものである。

2-8. 『講庭秘書書』（渋沢栄一館）

袋製1冊、半紙本（13.5cm x 16.0cm）。

慶長7年（1602年）3月の奥書記載は、松尾光により著された史料で、内容は同じ様に書かれたとされる。本項は重要な資料に属さぬが、その文脈から推定される。他の文献のうち、屋に関する8項は広範囲の設計図を記載しているが、あえて項目名を「覚書」の語を用いて復古的特徴が特徴である。

2-9. 『（河内家伝来）これも口利き用（二十三色）』（河内家）

無題紙、袋製1冊、半紙本（13.5cm x 16.8cm）。

序文に「講庭坂住人／河内家左衛門」とある。成立年代が不明で、書簡等の内容が書かれる。吉川家家書の所蔵年代から慶長15年（1607年）〜慶長文禄1年（1602年）の間に推定される。この河内家は、鍛錬業を営むとされるのが長野や木花家等の家族で、多様な技術を有している。本书は本書に於て（上用）であるとおり、上方の設計技術を伝えている。全面32号、屋、道具、木花、建物と広範な内容で、屋に関する6項は空室造構造向けの設計図を記載されているが、いずれも資料に関する学術的関係がある。

2-10. 『（河内家伝来）これも口利き用（二十三色）』（河内家）

無題紙、袋製1冊、半紙本（13.5cm x 16.8cm）。

錦緞名があるが、無題と同じ内容を有し西川家左衛門の著で、内容は堂と屋に関する3項で、堂に関しては広範囲中についに（覚書）という、体系的な記述ではない。

2-11. 『（河内家伝来）大中小三本ふ』（河内家）

茶表紙、大袋製1冊、半紙本（13.5cm x 16.0cm）。

万治四年（1661年）〜九月吉日（講庭坂住人／吉川家家書）の人である、内容は10項にわたり基本に関する資料の中に述べられている。補足的に広範囲へ適用される（覚書）記述を1項目以上増加している。

2-12. 『（伏見記）』（京洛寺）

無題紙、袋製1冊、半紙本（13.0cm x 16.0cm）。

著書家は京都及び近江地方に広く建築を手掛けており、平安時代を含めると、その業績は広範である。建築の内容が全部記載されているが、特に遺児の一部として伝えられる。

以上、本家伝来のうち重要で詳しいものを選び、本书に収めている。
冊中には算数数表及び
詩文等があり、第9冊は算術についての練習が記されている。建築全般のうち「建築理論」と「建築実例」会社の
「建築理論」というものは、建築全般のうち「建築実例」というもの
とは、別の記述が行われている。この場合、「建築理論」と「建築実例」
の取扱いは、それぞれの分野に応じて行われている。

2-9. 『諸木等録』（大原1710）／増補版（平成8年、9月）（以下『諸木等録』）：袋装1冊

奥書に『高良大社』（1687）／正月日 千葉県東部

表紙に『正月大社』（1710）／正月日・山田氏

著者の山田氏は、筑後地方で強大な勢力を示した高良大社を主とした工芸、建築にに関する研究を深め
ている。著作の内容は、文書・図面・仏像・神社の建物に関するもので、
文書・図面・仏像・神社の建物に関する性質を明らかにし、特に
宮殿などの建造物に関する記述が詳しい。

3-3. 《武家殿閣之図式》（東京大学）（以下『武家殿閣之図式』）：茶封紙装・1巻

宝徳10年（1662）秋後藤原武家の記で、文政11年（1818）内閣大臣
の手書で、21項目からなる管轄・面積・断面・詳細
の図面で、一部設計図を含むもので、武家屋敷の設計に
の図面が示されている。内容は、広間・対面所などの内部の殿舎、舞
台・屋敷等の装飾施工のようである。

4-1. 《武家殿閣之図式》（東京大学）（以下『武家殿閣之図式』）：茶封紙装・1巻

平和内大臣、筆者に関する記述はなく、江戸時代後期
の史料と推定できるが、全て図面で示される35項目に、建物を含む
の図面が網羅的に保存されている。当時の武家屋敷設計の様子を
網羅的に示すとされる建築図面が保存されている。

4-2. 《武家殿閣之図式》（東京大学）（以下『武家殿閣之図式』）：茶封紙装・1巻

筆者による記述はなく、江戸時代後期の史料と推定できるが、全て
図面で示される35項目に、建物を含むの図面が網羅的に保存されている。当時の武家屋敷設計の様子を
網羅的に示すとされる建築図面が保存されている。

4-3. 《武家殿閣之図式》（東京大学）（以下『武家殿閣之図式』）：茶封紙装・1巻

当時の武家屋敷設計の様子を網羅的に示すとされる建築図面が保存されている。
4-1. 『[竹内右兵衛書覚書]』（松江城管理事務所蔵）: 絵は表紙・袋絵 1
冊（高 7.3cm × 10.5cm）

絵は、竹内右兵衛の書覚書で、 والح子の大きな模写を示している。

4-2. 『新編 武家雛形（横山家蔵）』: 袋絵 1 巻・表紙 3
冊（高 36.1cm × 26.2cm）

4-3. 『新編 武家雛形（横山家蔵）』（国立国会図書館蔵）: 絵は表紙（袋
絵）1 巻・半表紙 3（高 30.0cm × 21.8cm）

4-4. 『新編三図紙』: 絵は表紙・袋絵 1 巻（高 28.1cm × 21.0cm）

4-5. 『武家雛形（横山家蔵）』: 表紙・袋絵 1 巻（高 21.5cm × 17.8cm）

4-6. 『[大工雛形]』: (松江大工道具展覧会) (以下略記): 絵は表紙・袋
絵 1 巻（高 39cm × 26.0cm）

4-7. 『大工雛形』: 上（松江大工道具展覧会）(以下略記): 絵は表紙・袋
絵 1 巻（高 39cm × 26.0cm）

4-8. 『数寄屋図法集』(1)（東京都文庫蔵）(以下略記): 絵は表紙・袋
絵 1 巻（高 25.4cm × 17.2cm）

4-9. 『[大工雛形]』: (松山市立図書館蔵) (以下略記): 絵は表紙・袋
絵 1 巻（高 34cm × 26.0cm）

4-10. 『[大工雛形]』: (松山市立図書館蔵) (以下略記): 絵は表紙・袋
絵 1 巻（高 34cm × 26.0cm）

4-11. 『武家家雛形（長野市立図書館蔵）』: 表紙 1 巻（高 22.5cm × 14.7cm）

4-12. 『[新編三図紙]』: 新編建地雛（福岡県立図書館蔵）(以下略記): 絵は表
紙・袋絵 1 巻（高 25.4cm × 17.2cm）

4-13. 『[武家雛形]』: (松山市立図書館蔵) (以下略記): 絵は表紙・袋
絵 1 巻（高 25.4cm × 17.2cm）

4-14. 『[武家雛形]』: (松山市立図書館蔵) (以下略記): 絵は表紙・袋
絵 1 巻（高 25.4cm × 17.2cm）
伝記等をもって、本来は池上住吉大宮殿の伝承を活躍が示すが、結合・分解の面で、個々の結果が異なり、写生を含む建築の内容を呈している。図面は（後述）の通りで、現存する建物群の主要な特徴とされる。

5. 加賀陵式土師系

建仁寺式の伝承は、江戸に入江した「江戸建仁寺源系」と、加賀陵堂を中心に伝承されている「建仁寺源系」に大別できる。北陸に伝承される建仁式の伝承ほぼ同様に、坂上本町が先例として、江戸時代後期のものと推定される。「伝記」と伝記の記載内容は、建物に関する記述を含み、伝記に記載される文を、図面を含む建築の内容を呈している。「伝記」の特徴は、伝承順序を記載することにより、より正確な伝承内容を求めるものである。

5-1. 『建徳寺御所絵図』（静嘉文庫所蔵他家文書書）（以下図面）：茶地金箔模様貼畳文書

元禄14年（1701）～元禄14年（1701）を含む絵図は、池上治の伝承を活躍が示すが、結合・分解の面で、個々の結果が異なり、写生を含む建築の内容を呈している。図面は（後述）の通りで、現存する建物群の主要な特徴とされる。

5-2. 『建徳寺御所絵図』（乾）（静嘉文庫所蔵他家文書書）（以下図面）：茶地金箔模様畳文書

図面と同じ著者・成立年代と推定でき、横山吉命・山口善慶・池上政宗・池上政道・池上政教を含む伝承を活躍が示す。池上治の伝承を活躍が示すが、結合・分解の面で、個々の結果が異なり、写生を含む建築の内容を呈している。図面は（後述）の通りで、現存する建物群の主要な特徴とされる。
技術を伝える論史料で、いわゆる堂宮歴の書写本が大半であるが、
歴数巻として7巻史料が確認できる。
6-1. 『武家文書』（東京国立中央図書館蔵）[以下武文]：茶葉表紙・1巻・巻子本（31.2cm×65.2cm）
奥書の「富大楠梁／甲斐国陰」は甲府家第3代宗賀を指し、成立
年は承応3年（1654）～享保2年（1687）と考えられている。題名に
顕示されるように武家歴書等の技術書で、全12巻は図面を Playground (12) に
図面に寸法指示は現存であるが、非常に正確に描かれている。
建築名に関する「陽」が付され、德川家の殿を意識して記述されたと
推察できる。記載内容は、寛展・殿・舞台・武家門・等がに
ての平面/立面図で、広間内部の帳についても寛展図面を示している。
なおで玄関や花灯塗室を記載している事は、（唐様）の
正統を誇る甲府家の技術書として特徴を考える。
6-2. 『大工方略全編』（東京大学典文庫蔵）[以下大工]：茶葉表紙・1巻・巻子本（30.0cm×170.0cm）
著者の坂東富雄は、甲府家初代宗賀とつながる人物で、また項
目間を「成宗令（1681年）」十二月十四日」との署名年記が記載される。
『雑撰』というと、「和泉富雄兵衛師薬師／甲斐田又兵衛／元次等所蔵」等の複数の家業の設計図が混在しており、ま
たこれらに題目の正しい記載をされる等、まさに「雑撰」といえば、原本
と本の様々な建築需要書の存在が推察できる。全31項目に、家・
社・門・塔・屋・城および構築内容における（図面）、および図
面への寸法指示の書き込みにより、寸法図面を読むことができる。
屋の記載内容は、屋頂・間・面に関する平面/立面/断面（室内外
図）や部分詳細を主体に、（図面）とともに記載される。さらにより
一般的な、家屋木の端製作も記されている。
6-3. 『甲斐東宮伝来目録』（静嘉堂文庫蔵文献蔵）：御所帳小縮
本（以降：御所帳）：茶葉表紙（後補）・装絹1冊（周絹幅4cm×巻子本3巻）
・長大濃本（26.7cm×19.1cm）、「小縮目録」（以降：小縮目録）：茶葉絹帳入布表
紙（後補）・1巻・巻子本（28.6cm×78.2cm）
いずれも奥書に、貞享元年（1684）または貞享2年甲斐白楽宗賀
の配名があり、上記のような年月と補正する事がある。
にはこの小縮目録について、院家院覚大幹の「甲斐家
加藤木ノ削文艺/甲斐家覚化文/甲斐家覚化文」とか
は考えられるが、後述の『甲斐家覚化文』を基本に伝存する史料で
ある。
御所帳の3項目は、御所帳・皇宮宮に共通する部分需要として
基準となる寸法図面を（図面）に記載し、部分から全体の概念をはかる
構築図面が見られる。さらに御所帳はこれを（図面）に示している。
6-4. 『覚化寺覚化目録』（東京国立中央図書館蔵）：茶葉表紙（以降：覚化目録）
（以降：目録）：茶葉表紙・装絹各1冊（全4冊）半紙（
26.8cm×16.8cm）
『醒観』/「神社」/「神宮院殿」/「隆宮」/「上様」/「上様三段目」/「門間」/「神
家」/「覚化」/「堂塔類」/「東慶院」の14冊構成で、「目録」を
除いた全34冊に記載されている。
著述年代は延宝五年（1677年）～宝永五年（1718）の間で、長年にわたり成立した成果で、現在は4代甲
斐家覚が宝永末年頃、父家覚や真覚家覚の着述を、なかで挿絵の
形で編纂したものである。甲斐家覚の採用に、特に皇宮興建設計論を
関与するもも参考に被取受けた基準本で、四代王家流の『図明』に対
する観察性格をもって、当家成立以後の史料として規範となる。
目録は『目録』とほぼ同内容であるが、比較して『目録』が巻子・芯子
が若干ある。目録と『目録』と比較すると、両書で類似する面面が描
かれてはいるものの、構成・項目数や一部の木製について相違し、
本書ほどに整備されていない。そして御所帳は、甲斐家覚に加えて『甲
斐家覚伝来目録』/『覚化寺覚化図』の内容を、一部含んでいる。
6-5. 『御所木丸広間増建方と結縁等伴図絵集』（東京国立中央図書
館蔵）[以下絵集]：茶葉表紙・1巻・巻子本（27.5cm×336.3cm）
甲斐家覚の芸術歴史を筆写等ほど明るくはなくとも、甲斐家覚による宝永
元年（1704）～享保2年（1726）の史料と推定できる。武家歴書に典
型を示し、江戸城大広間広間の基本構成をもとに設計論を5巻に記載
する、当時の設計理念をうかがい知ることができる。（図文）も記載されるが、立・断面
（室内外の部）を主体として、内容は比較的詳細に及ぶ。
6-6. 『社向木例』（東京国立中央図書館蔵）[以下社例]：茶葉表紙
・1巻・巻子本（17.8cm×1287.0cm）
甲斐家覚による、宝永（1704～1710）頃に書かれた史料と推定さ
れている全（図文）による一例であるが、屋に関連する広
間の1項目を取り、『建家寺家伝家書』にみられる内容である。
住宅設計論を読んでいる点で、「社向木例」の題名は適切である。
庭園設計において『建家寺家伝家書』と比較すると、概して記述
表現や木製内容が類似するが、権利者の身自の考える意図が変
部分も盛り込まれている。こうした構想から、甲斐家覚が18歳の
時代の権利者様が社向木例を学ぶために考え始め、やがて途中より目的を変え
、住宅建築を含む諸建築家を含む及んでものを推進し、図面に謎を
付加された「木製」なる文字に、その後を推察する事ができる。
6-7. 『図舘甲斐木編』（東京国立中央図書館蔵）[以下図舘]：緑地
表紙（後補）・1巻・巻子本（27.0cm×192.5cm）
富塚御作事方大楠梁/富塚御作事方/甲斐木命の編成である。大
和5年（1834）～慶安4年（1851）の史料である。この図面の内容が全部
日本の14項目ご
は、甲斐家覚の本の知識（基幹）と部分的な関連しか
ない。特に屋の記載内容である広間・舞台・舞楽は、公刊に類す
内容である。収録順番に特徴なく、内容的な重複項目を含む。
7. 小普請方系本
江戸中期以降に作事方を覆従する業績を残す小普請方大工家の
建築書は、固有の内容が多く含まれる2巻史料がある。
7-1. 『柏木御作伝来目録』（御所木丸増建方と結縁等伴図絵集）[以
下図集]：緑地表紙・装絹1冊（全5巻）・巻子本（32.9cm×717.1cm）
『神社之部・門之部・仏殿之部・塔之部』と35巻による。全
図集の3項を含む史料は、御所木丸御作室に共通する部分需要として
基準となる寸法図面を（図面）に記載し、部分から全体の概念をはかる
構築圖面が描かれる。さらに図集はこれを（図面）に示している。
7-2. 『武家広間仮想図之事』（明治大学蔵）[以下図集]：茶葉表紙・1
巻・巻子本（26.6cm×405.7cm）
天文5年（1715）に二葉在之『小河原作太夫』で、著者の著者
独特の名前で、武家歴書の設計論で、既に、広間、舞台・舞楽・舞楽
門などの内で（図面）に記載され、技術的な内容を中心に扱っている。
7-3. 『武家広間假想図之事』（明治大学蔵）[以下図集]：茶葉表紙・1
巻・巻子本（26.6cm×405.7cm）
表1 屋敷築形の著述刊行年次一覧（著述・刊行年次の明確な史料には、西図にて示す）

<table>
<thead>
<tr>
<th>年代</th>
<th>安土桃山時代</th>
<th>後多久寛時代</th>
<th>安土桃山時代後期</th>
<th>享和時代前期</th>
<th>江戸時代前期</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>1500</td>
<td>1550 60 70 80 90</td>
<td>1600 10 20 30 40 50</td>
<td>1650 60 70 80 90 100</td>
<td>1700 10 20 30 40 50</td>
<td>1750 60 70 80 90 100</td>
</tr>
</tbody>
</table>

凡例  ●・着写本  ○木版本  参照略語（本文参照）
8. 建築系本
以上の類型から逸脱する建築系本の5史料を考察する。
8-1. 『やの物』（内房家蔵）[以下図23]: 茶表紙・大和紙・半紙本（23.3cm x 15.6cm）
中世建築の中心地、鎌倉の技術内容を伝える建築系本である。表紙・奥書に『内房同』、また『延徳四年（1768）/六月/五月日』とある。屋についての1項目からなる。
8-2. 『新編選遺文版規範尺』（東京都立中央図書館）[以下図24]: 地紋入布表紙・袋縫1冊（全3冊）・半紙本（22.4cm x 15.2cm）・単版
無端・版縫（10cm以下）
公刊版本である。他の公刊本とは内容構成が全く異なり、むしろ後述『建築構法』に似た内容をもっている。『上・下』『中・下』の全3冊組であるが、それぞれ上・下とする目録および内容があり、また『中・下』の最初に連続している。著者は、元禄三十四年（1700）一月吉日の『書簡』に注を付す。この建築系本は、それぞれ上・下・中に分類されており、下には机など、上には机など、建物の位置を示す図を付録する。つまり、内容的な建物屋敷の広範囲の設計論を大なく、「日本」および『武家』の屋敷を記録するので、普通の住宅建築学を幾何学的形態で示されるものである。
8-3. 『大工構築手摺』（国書刊行会）[以下図36]: 黒茶表紙・袋縫1冊（13.5cm x 19.2cm）
児玉与次郎の著書『元文四十四年（1719）八月廿八日児玉與次郎筆』とある195。主に規模や絵図を描いたもので、屋については2頁である。建物の図面を記録し、設計事例を示すべくことになる。
8-4. 『日本建築研究図考』下（東京大理）[以下図7]: 金箱地紋布入表紙・袋縫1冊（全3冊）・半紙本（27.2cm x 38.7cm）
『上』の下の全2冊、表紙題名は後補であるが、これを復元する。著者は江戸時代後期と推定され、児玉家の人々を含む史料である。「上」には、他の建築家が構築を描き、一部は書面を記録するものである。下には木版を引くに至るまで。この間の内容も、建物の屋敷としての重要性が示される。
8-5. 『建築法』（京都府立建築資料館）[以下図27]: 黒表紙・袋縫1冊（全3冊）・半紙本（26.9cm x 73.5cm）、『しみでみの事』（以下図28）: 地紋入布表紙・袋縫1冊（全3冊）・半紙本（31.9cm x 23.2cm）、『むやまでむのもん』（以下図29）: 地紋入布表紙・袋縫1冊・大本（31.9cm x 23.2cm）
史料は、著者により「物の如く書かれたものと判断するが全てに名を欠くもの。また著者名は江戸時代後期の史料と推定できる。表紙の内容は、建物の図面を記録され、また冊子は『造剣のための事』『三寸のための事』等、様々な内容である。図28は木版・絵図、図29についての同14項目からなる書籍の内容を扱い、築屋形に関しては主書の1項目のみである。図29は、主幹に含まれる全項目で、まず全図全体についての設計論を記録した後に、外部間収内間収を説明している。図28は、概と層室外に関する全項目で、主幹建設計論の史料である。

- 268 -